

住職継承法要 表白

本日ここに、真宗大谷派岸上山受念寺におきまして、住職継承法要を厳修し、併せて永代経法要並びに先代住職・浄敬院釋正雲の一周忌法要を兼修するにあたり、阿弥陀如来の尊前に、謹んでこの法要を奉告申し上げます。

およそ私どもの歩みは、老病死をはじめとするさまざまな苦悩の歩みであります。その苦悩を遠ざけようとする中であつて、尽きることはない迷いの現実と、愚かな自己のあり様を日々知らされております。

しかしながら、そのような私どもをこそ憐れみ、如来は大悲の本願を發されました。そして、自己を見失つた私どもに、本来の自己に帰れと呼びかけるその願いに出会い、念仏に生きる道を歩まれた先人が確かにあることを、親鸞聖人のお姿を通して教えられてまいりました。

この度、私釋正仁、本願念仏の聞法道場として創建された、この受念寺の第二十二世住職を拜命いたしました。

思えばかつて、生きることに行き詰まり、人生をあきらめかけていたこの身が、今日、ここに立たせていただいておりますことは、まことに不可思議なるご縁と申す他ありません。生涯の師と法友との出会いにより、生きることが学ぶ場が開かれ、さまざまな有縁の方々と語らい、そして家族に日々生活を支えられ、今日まで歩ませていただきました。

そして、そのような出会いへとこの身を押し出してくださったのは、この受念寺において五二〇年にわたり息づく、無名の先達の真摯な聞法生活の積み重ねと、先代住職である父の歩みに他なりません。

世間においては、自分よがりのものさしで人を評価するばかりで、真摯に苦悩に耳を傾ける眼差しが見えにくくなっております。しかし仏教は、生きることと真正面から向き合い、もがき苦しんだ人々の歩みの中から紡ぎ出された、血と涙の結晶であります。そこにこそ人間の真実の姿が示されております。

老病死の苦悩を抱える私どもが、このどうにもならない宿業の身のままに、南無阿弥陀仏のお念仏に照らされ、お念仏に育てられ、この苦悩を縁として、生きることが共に聞き聞いてゆく僧伽として、受念寺は長きにわたり護持されてまいりました。

このたびのご縁を承け、その歩みを受け継ぎ、仏法が生きてはたらく念仏の僧伽となるよう、有縁の皆様とともに歩んでゆくことを、謹んでここにお誓い申し上げます。

令和八年五月九日

岸上山受念寺第二十二世住職 釋正仁 敬って白す